昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十七年六月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一五九号）

慈光

第十四巻　第六號

目次

教行信証「信巻」三信釈（二）……近角常観…（1）
花に寄せて……近角真観…（7）
仏燈をかかげる……松本解雄…（10）
横川法語……花田正夫…（14）
堂の鈴……佐藤強三郎…（19）
ジャータカ物語……（21）

教行信証『信巻』三信釈（二）

『至心釈』法然聖人と親鸞聖人

近角常観

○

さて前席来は主として人生問題より話したのでありますが、なお御本願の上より話すことが多いのであります。でこれよりは再び本願の筋合いの上より、お話をすることとする。それには先ず法然聖人の『選択集』の御教化より話す事と致します。

話が漸次にこまかくなりますも、この浄土門の教えに於いて、法然聖人の御教化と、親鸞聖人の御教化とが一致して頂くことが難しいのであります。

第一、斯く言う私が、真宗の書籍を読む上に於いて、何うも長いこと、法然聖人の示され方と、親鸞聖人のお示し方とが、違うという気がして仕ようが無かつた。で親鸞聖人は法然聖人の御教化を受けられたと言いつゝも、法然聖人は念仏主義である。親鸞聖人は信心主義である。法然聖人は一代如法にお喜びなされたのであるも、親鸞聖人は肉食妻帯をなされ、何うもその間、おもむきが違うと云う考えが腹の底に在るもの故、一つだ〳〵と言いつゝも、区別があるという思いが、長い間抜けいで仕ようが無かつた。

それはも一歩露骨に言うと、親鸞聖人を徹底なされたものだとすると、法然聖人にはまだ自力の遺り物がある如く見ゆるのであるし、又法然聖人を他力の正意だとすると、親鸞聖人には何処と無く浅間しき所がある如く思われて仕ようが無いのである。

同じ他力故区別がないと思いつゝも、私共真宗に居てさへそう思う位ゆえ、浄土宗の方にすれば、浄土宗に於いては親鸞聖人のことを排師自立と貶す位ゆえ、ここの所の落着きに充分ならぬ処があるも、実に無理からぬ処があると思う事であります。

先ず親鸞聖人御一代の書物を拝見しても、聖人の書物では、普通に見て「少しおかしい」と思うような所が、殊に

肝腎な点になつて居ることが多いのであります。御存じの如く、善導大師が至誠心を釈せられた処の御言葉に、普通に読むと、

「外に賢喜精進の相を現じて、内に虚仮を懐くことを得ざれ」

というお言葉がある。「外に賢善精進の相を現ずるも、内に汚き心を持つて居らぬ故、内に汚きものを持ちながら、外に殊勝相な風をするも、うそである、偽りであるぞ」との御言葉であります。

処が親鸞聖人はこれを読み方を替えさせられて

「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり」

「第一外に賢善精進の相を現ずることを止めて仕舞え。何れ丈やつても虚仮不実の塊りにして、内から善くなれる者では無いぞ。その善くなれぬ浅間しき者が、何で助かるのであるか。それだからこそ見捨てられぬの、広大のお慈悲一つでたすかるのである」とお読み下されたのである。これが何であるか。当り前は善導大師がお示し下された如く、「外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮を懐くことを得ざれ」と読むが当り前でありますも、それを親鸞聖人は広大なお慈悲を、あなたのお頂きなされたる頂き心地より、直き〳〵お示し下されたからであります。

で、親鸞聖人の御教化は、いつでも一応読みて「おかしい」と思つた処が、きつと意味の深い所なのである。而して今のは唯一例に出したのでは無く、前席来お話する処の、至心釈のお示しが、即ちこれなのである。「中に汚れた心を隠して表に善い顔をするな。内にはきたなきものが一杯あるぞ、その悪しき者を見捨て給わぬお慈悲がましませばこそ、その者が安心させて頂けるのであるぞ」とお示し下されたが、至心釈のお意なのであります。

○

そこで今の親鸞聖人との関係も、ここで能く解る故、解りよく言おうと思います。それは私の常に言う彼の手織りの着物のたとえを言うと能く分る、之を申せば前席来お話した事が、更にはつきりすると思う故、これを申そうと思う事であります。

こは度々申す事なれども、法然聖人が念仏を御すすめ下された故、念仏の元祖法然聖人と申し奉る事がある。処で念仏の元祖法然聖人と言うことは、法然聖人が日本において唯念仏をお勧め下された故、念仏の元祖と申し奉るのでは無い。それならば日本に於いて、永観律師を始め、念仏をお称え下された方は法然聖人以前に数多くある。必ずしも法然聖人が念仏の元祖ではない。

然るに法然聖人を念仏の元祖とまで申し奉るは、専修念

仏ということであつたからである。専修念仏という事は、法然聖人から始められたからであります。法然聖人の念仏は、実に専修念仏である。専ら南無阿弥陀仏、々々々と念仏するのである。これが法然聖人の念仏の特徴である。而してこの専修念仏のために、法然聖人も親鸞聖人も流罪にお遇い下されたのであります。

先ず一応順序を言うと、法然聖人は御存じの如く、九歳の時、親御が仇のために斬られて亡くなり給い、十五歳御登山以来、有りとある道を求めて御修行なされ、四十三歳の御時迄、一切経を五辺まで読まれたのであるけれども、どうしても安心が出来ぬ。最後に四十三歳の御時、黒谷の報恩蔵に於いて、善導大師の『散善義』をお読みなされた時、次の一句に当りて、この浄土門の基をお開き下されたのであります。其の御文は

一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざる者、是を正定の業と名く。彼の仏の願に順ずるが故に。

「一心専念弥陀名号」……ここの処が実に肝要であります。一心に専ら阿弥陀仏の名号を念じて、他に心を懸けぬのである。阿弥陀仏の外になお心を寄せるならば「一心に専ら」では無い、一心に専ら阿弥陀仏を念ずるのである、専ら故、雑りもの無く念仏をするのである。

而して斯く「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥時節の久近を問わず、念々に捨てざる者」……即ちいつも〳〵南無阿弥陀仏々々々々と念仏を喜んで捨てざる者、これを往生浄土の「正定の業と名く」と。

して次に「彼の仏の願に順ずるが故に」……この「順彼仏願故」この五文字が大切であります。法然聖人は自らこの「順彼仏願故」の五文字を見て、一心覈証の時、浄土門の基を開いたと仰せられてある。「彼の仏願に順ずるが故に」とは、その一心に専ら弥陀の名号を念ずるは、こちらよりすがり求め、自分で力みて一心に専らにするにあらず。余行余善はしてならぬと、こちらより力みて一心にすがるのでは無い。阿弥陀仏の本願に、一心に専らと仰せられてあるのである、阿弥陀仏の本願を見ると、十方衆生戒を持てと仰せられて無ければ、行をせよとも仰せられ無い、ただ

「若し我仏を成らんに、十方の衆生、我が名号を称して、下十声に至らん。若し生れずば正覚を取らず。」

とあるのみである。法然聖人の着眼せられたは、実にここなのであります。「唯念仏せよ」とだけならば、即ち先に言う如く、法然聖人以前の他師にもある。がそれでは、戒を仕てもよい、行を修してもよい、余行余善を仕てもよいが、先ず念仏を称えよと言うことになる。処が、法然聖

人のは、唯一心に専ら念仏と言われたのである。唯一心に専らとは、即ち仏の本願に、唯一心に専らと誓わせられてあるからである。十方の衆生、罪人も悪人も、唯南無阿弥陀仏ばかりと、仰せられてあるからである。それだから「彼の仏の願に順ずるが故に」である。

『歎異鈔』の二章に、法然聖人が「ただ念仏して弥陀に助けられ参らすべし」と仰せられたただは、他になおするならただでは無い。吾々五逆十悪の者が、ただ念仏ばかり故に、ただなのである。『選択集』の法然聖人の唯専ら念仏の御教化は実にここから出て来たのであります。

○

そこでちと緻密になるも、丁寧に聞いて頂こうと思います。先ず青年の方に、阿弥陀仏の本願から分つて貰わねばならぬから、青年の方に分りよいように、これは言うてよくないけれども、一寸、仮りに申します。

抑々全体宗教とは何であるか、と言うに、仏なる方が人生に超絶して在つてもそれは宗教ではない。宗教とはこの罪業深重、煩悩熾盛の人生と、総て人生以上の尊い「さとり」の仏の境界との間に連絡が着く処が宗教である。絶対の仏の境界と、この凡夫の我々との間に連絡がついて、凡夫がその仏の境界に行ける処が宗教である。仏法とは即ちこれなのであります。

で、単に仏の「さとり」の境界だけありても宗教にはならぬ。真如一実の仏境界ばかりありても宗教では無いのである。金持と貧乏人とがありて、金持が何時までも金持のままで居るので貧乏人のためには何もならぬ。貧乏人が金持になれる連絡がついて初めて宗教なのであります。金持が金があるばかりで、貧乏人との間に連絡がつかなくては宗教にはならぬのである。

其処で、若しこちらが、その貧乏でやつて行つて、自分の努力で金持になれるならば、これも一つの宗教である。我々が凡夫の境界より、三僧祇百大劫の長の修行を経て、仏の「さとり」の岸上にのぼるならば、これも確かに一つの宗教である。これが聖道門自力の教であります。

処が今、浄土門は我々がそれで行けるなら一通りであるけれども、如何せん我々はその自力の道では行けぬ。その行けぬ者を岸上なる仏の境界から見て下された時はどうであるか。脚下に今水中に溺れんとして居る我々の有様を岸上より見て下された時に、仏のお意は何うであるか。貧乏な者、難儀して居る者、苦しんで居る者を見て、慈悲が無きならば「さとり」の人では無い。既に「さとり」の仏でありますからは、その苦しんで居る者、迷うて居る者程、それが可愛想でしようがなく、其処でその岸上より一条の縄を下して「さあ来い」と言つて下されたが、即ち浄土門

他力なのであります。

で「善き事すれば仏になる」戒行坐禅をする時は仏になれる」と言うは、そは下より上に向う時の話である。今船が難破して、多くの者が海中に沈んだ。中で一人だけ怒濤を凌いで向うの島に泳ぎつくは、即ち自力である。先達てタイラック号が沈没した時は、力の強い男の方より先に助けたか。到底助かる見込の無い婦人子供の方より初めた如く、今岸下に悩んで居る我々衆生を不憫と岸上より縄を下された時は、即ち『歎異鈔』三章の

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを世の人つねにいわく、悪人なお往生すいかにいわんや善人をや、と。この条一旦そのいわれあるにたれども本願他力の意趣にそむけり。云々。

のところである。「悪人すら助ける、如何にいわんや善人をや」と言うは、自分で善い事をして行く普通の場合の事である。今岸上より縄をお下ろしくだされたは、今生命のきれる者、何程言われても悪心の止まぬ者、その者ほどよけ可哀想で見て居られぬとの思召しである。抑々宗教上、阿弥陀仏の本願はこれを外にしては無いのであります。

○

さて今岸上の境とは、真如一実の佛の境界である。海とは我々凡夫の迷海の事であります。処で我々到底自分で岸上に至れる道が無い故、斯く上より一条の縄が下されてある。処が、岸の上の真如一実の境界は、我々岸の下に居る者に分りよう筈が無いのである。其の分からぬ者を岸上より御覧下さる時、可哀想でして見ようなく、一如法界の都より、態々法蔵菩薩と名告りを揚げ、其の者を救わんと顕れ下されたが、阿弥陀佛の本願の縄なのであります。

で我々にはこの御本願以上の事は分りようが無いのである。それより先のことが知れる位なら、この本願の来て下さる必要は無いのである。

かつて私の親友、西川理学士が亡くなられる時、私はお話をした「佛の境界はどう云う訳でおたすけ下さるのか、そんな事は何程考えたつて我々には分らぬのである。そんなことが分る程ならば、何もお助けを蒙らいでもよいでは無いか。我々にそれが分らねばこそ、茲に本願の縄をお下ろしくだされてある。我々はこの仕て見よう無い時に、何かは知らず、此の一条の縄がいて下さることが有難いでないか。我々は唯この縄を頂けばよいのである」と申した時に、御安心下されたのでありました。

で我々にそれが分からねばこそ、茲に縄をお下ろしくだされてあるのである。しかるに我々がその縄の源を知ろうとするのは、実に大間違いなのであります。であるから宗教の特色は、この他力本願に於いて、遺憾なく宗教の根本

義が発揮せられたものである。

何故かと言うに、宗教の救いという上より言う時は、実に斯く、他力は、救いも〳〵まる〳〵のお救いである。実に救いの真髄の発揮せられたものであります。

金持が、幾ら金を持つて居つても、唯夫れだけでは救いにはならぬ、金持が貧乏人のため、その持つている金銀財宝を「さあこれを遣ろう」と挙げて投げ出した処で、救いである。『教行信証』の教巻の初めには

斯の経の大意は、弥陀誓いを超発して、広く法蔵を開いて、凡小を哀れみて、選んで功徳の宝を施すことを致す。云々。

而して、その阿弥陀佛のお与え物は何かというに、即ち他力本願の品物である。そこで我々がもうこれ以上の事を知ろうとするのは、間違いなのであります。

○

さてそのお与え物の本願はどうであるか。そこが即ち先言う一心専念であります。

既に先にも申すが如く、我々此方より岸上にのぼれるならば、上より縄をお下ろしくだされなくともよいのであるが、如何せん、上りては落ち〳〵、自力作善では、自力かなわで流転し来た身なのである。如何にいわんや底下の私々、水面上に浮びも出来ぬ我々の身の上である。修行、戒律、下より上る法はいくらもあれども、我々には一つも出来ぬ。その余のことは一つも出来ぬ者のために、特に下ろして下された一条の縄が、選択本願なのである。選択本願は、善きものを選びとり、悪しきものを選び捨てて下されたが、選択本願である。諸佛浄土の中より、善きものを取り、悪しきものを捨て、お作り下されたる四十八願である、殊にその四十八願の中で、その佛の境界と、我々凡夫の迷いの境界との間の連絡をつくる根本義が第十八願である。この凡夫の私がその佛の境界に往ける連絡を着けて下さるのが、この第十八願である。故に第十八願は、実は佛教中の佛教、宗教中の宗教、選択中の選択である。

故に『愚禿鈔』の中には

本願一乗は、頓極頓速、円融円満の教なれば、絶対不二の教、一実真如の道なりと知るべし。専中の専なり、頓中の頓なり、真中の真なり、円中の円なり。一実一乗は大誓願海なり。

と、斯く親鸞聖人のお示し下さるは、茲をお知らせ下されたのであります。

続く

花に寄せて

近角真観

△編者註▽本稿は日本産業協力連盟発行「人と人」誌の創刊一〇〇号記念に投稿せられたものを転載させて頂きました。

再度の北海道の炭鉱暮しの務めを果して、今年三年振りで、四月の花見が出来る。

北海道の春は五月、秋は十月。特に季を設けるよりは、むしろ夏、冬の序曲と呼ぶにふさわしい。飛び来り走り去るそのあわただしさに一脈の詩情なしとしないが、本命はやはり万物生成のたくましい夏と、天地寒凍のしずかな冬とにある。

潔く、男性的な移り変りは冷水摩擦のように爽快ではあるが、花鳥諷詠を托する趣に至つては、内地の暖気涼気に包まれた中間色豊かなスローステップに如くはない。特に秋思春愁において然りである。

×××　×××　×××

春はおぼろ……とか、……都塵雑踏に在りとはいえ、ひさかたぶりで立春、雨水、啓蟄、春分と霜柱が融けはじめてから、じわり〳〵と、小庭の眠りをさまし、一陽一雨、緑を点じ、つぼみをふくらまし、紅を添え、艶を加えてゆく、入念な化粧ぶりに接すると、多情多恨、おぼろ夜に身もだえした青春の日を想わせるに充分である。そして桜が……、四月のお花見がやつて来たのである。

×××　×××　×××

年々歳々花相似
歳々年々人不同

唐の詩人、劉廷芝は、昔紅顔の美少年であつた白頭翁を憐んで、いみじくも歌い上げている。

それはさておき、すこし理窟を云わせていただけば

歳々年々人不同
の運命に至つては、

古今東西人相似
といわざるを得ない。

まことに生老病死の四苦の歎きは、原子力時代、宇宙時代がいかにすばらしい開発を遂げようとも、人間の生きる限りはまぬがれ得ない宿業というべきであろう。

×××　×××　×××

お花見のはなやかな時期に、花御堂をしつらえて、四苦解脱の大覚者——釈尊の誕生会を寿ぐ習慣も、思えば意味深い行事である。

春闘にひしめく日本の今日的問題に対して、余りに迂遠と笑うことなかれ。むしろ人生根本の問題とはなれて……生活自覚の・覚他と無関係な問題として、政治、経済が、争われている現代こそが、文明・文化の名において批判さるべき側にあるのではなかろうか？国際的にも然り、国内的にもまた然りである。

×××　×××　×××

迷情の四句は四句皆非なり
悟情の四句は四句皆是なり

という。

人生を有とするも、空とするも、亦有亦空とするも、非有非空とするも、迷情なる限り皆非、悟情なる限り皆是であるという。

近代が豊富なる物質的繁栄をもたらしたことを疑う者は誰もあるまい。その基礎となつた、またその上に開花した思想・芸術・学問の豊饒も、また人の知るところである。

しかし、その「誰」の、その「人」の安心解脱……、精神の和ぎ、おたがいの睦み合いの根底は、今やどこにおかれているのであろうか。

咲き誇る花に対して、かく問いかける者は、蓋し私ばかりではあるまい。

×××　×××　×××

人間精神を形骸に閉じこめるまでに化石化してしまつたヨーロッパ中世最後の盛儀であつた十字軍は、奇しくも近代誕生の産室を準備する結果となり、ルネッサンスは前者の弔鐘であるとともに、後者の力強い産声ともなつた。

次いで、新大陸発見、宗教改革、産業革命とだん〳〵背丈を伸ばして青年期に達し、さらに第一次、二次の世界大戦を経て現在に至るのであるが、壮年期以後のその成長ぶりはすばらしくも且つ無気味であり、マンモス的であるとともに畸型的でもある。地球を呑みつくしてカラミあつているその幹と根は、熱帯の熔樹を思わせるように、赤白、左右に別れてひしめき合い、鬼百合のようなその花はそれ〳〵の毒気をかけ合つて相手を枯らすことを使命とするごとくである。

それのみでない。指導者ヒットラーは首を絞められ、同志スターリンの墓は暴かれた。

惨害殺戮　迭相呑噬
心口各異　言念無実

夜半の嵐におののきながら、一時の華麗に恋慕・涕泣の憂いを散ずるはかなさ、もろさを、人は文明の幸福と感じなければならないとすれば、それはよき常識に反すると答えねばなるまい。

×××　×××　×××

汝自らを知れ。

汝の欲せざる処を人に施すこと勿れ。

近代を生んだ徳目であつたこの言葉は、修身斉家の場では実践によつて充たされ得たとしても、国際社会、国家社会、階級社会の政治的、経済的行動においては棄てられた花であつて、治国・平天下の結実からはほど遠い空言となつてしまつた。

この落差をオドオドと不安に眺め、クオ・バアデイスと自らに問いかけているのが、ほかならぬこの文明を産みかつ育てた現代人であり、その悲劇と喜劇であるとすれば、次代への開幕には、いかなる俳優と脚本とが選ばれるべきであろうか？

英雄の心乱れて麻の如し。

まこと文明は進歩するが、人間は進歩しない。いな人間の精神を枯らし、荒廃に導く歴史自体が果して進歩の名を僭称していいものかどうか？ヨーロッパ、アメリカの敏感なセンスは斯く自問自答しているとの音信もある。

西洋の東洋への遍歴、精神界、思想界における第二の十字軍がすでに編成されつつあり、いまや旅立ちへ準備が行われつつあるといえよう。

×××　×××

人は何か。それは何のために生きるのか。東洋の覚者、釈尊と孔夫子との出発点は、この問いであつたかに思われる。

そして、それ〳〵宗教的実践、道徳的実践において、立派な解答を築かれ、しかもわれ〳〵の祖先は思想的に、人生的に、この偉大な遺産をわがものとして、世代を生きぬいた尊い事蹟をもつているのである。

その教えは、人の本質に根ざすが故に、千古の歴史を経て今日なお新しい泉である。

ただ言教のみあつて行信なき末世にあつて、夜半の嵐におののきつつも、善知識の仰せにしたがつて、この泉からの一飲みにおのが渇を癒やし、猛然と実務に立ち向つて、現実のなかに「ここに泉あり」との証を得んと志すのみである。

×××　×××　×××

敗戦の混乱から立ち上つて生きぬいて来た今日までの日本の歩みについては、見る人々によつてそれぞれの批判もあろうが、各界実務家の勤勉な努力の賜物であることは間違いがない。

その間、本誌は「ここに泉あり」の立札を高く掲げ、各界実務家にに呼びかけて一〇〇号を数うるに至つた。偉大である。

今後、東西両陣営の緊張下に、自主の名誉を守つて、経済、文化の発展をめざして進むわが国実務家の努力は層一層大となり、各界における努力の内容もさらに徹底した調和が望まれる次第である。

柳は緑、花は紅

各界実務家の努力が、国際社会において健やかに開花することを切に念じつつ、私もその驥尾に付して進みたい。

昭和三七年四月八日（花祭の日）

仏灯をかかげる

——真宗教義についての疑問に答える——

松本解雄

この夏（卅六年）宗教学の宿題の中に教育学部（愛媛大学）のO君がつぎのような疑問を提出した。これはO君のみならず現代の若いインテリ層にとつては、普遍的な疑問と考えてもよいのではないかと思われるので、その疑問に対して私の考えているところを述べてみたいと思う。

疑問の要旨をまとめると大体次の三点に帰するようだ。

一、真宗で説く他力の救済による未来往生思想は、近代精神から遠く離れ、そのような信仰は現代人の承認できるものであろうか。

二、従つて理性の納得のいかないままに、ただ「不思議と信じなさい」と言われても、かゝる盲目的信仰はかえつて世の中の進歩を阻害することになるのではないか。

三、宗教家（ここでは真宗僧侶）が、この困難な時代に活発な活動ができないのは何故だろうか。

右の疑問の中、一と二は結局、理性と信仰との対立、更に言えば科学と宗教との対立の問題となり、三は現代宗教家に対する批判である。順序を変えて最後の問題から始めることにする。

この問題はかつて機関誌（蓮）上で一度触れたことがあるが、もう一度繰り返して述べることにする。さてO君の言うように、現代の宗教家（ここでは前述のように真宗僧侶）は無気力であり、仏教者としての使命を果しておらず、単なる儀式僧として細々と命脈を保つているに過ぎない。勿論例外はあると思うが、それは極めて少数であつて、かかる批判は至極当然だと思う。然らばその原因はどこにあるのであるか。私のみるところ、それは一言にして言うならば、真の意味における信仰の欠除と言つてよい。言うまでもなく、真宗教義においては、阿弥陀仏の本願力によつて、善人も悪人も、賢者も愚者もすべて救われる。必要なことは人間の力ではなくして、弥陀仏の願力を信ずることであり、それは念仏――名号――に全現されているから、その念仏を信ずることであると云つてもよい。経典に「その名号を聞いて信心歓喜す」とあり、又歎異抄第三章に「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」と示されている。

ところが、ここにいう「信ずる」と言うことは教義を知的に覚えることではなくして、念仏によつて仏心と一つになること、即ち如来との出合いであつて、それは体験的事実をさすのである。そしてその体験は、宗教学でいう回心（えしん）であつて、この回心の事実によつて信仰が確立するのであり、その方法は前に引用した経典にあるように、法を聞くことにある。

然るに今日の教団を形成している所謂僧職にある人達はこの最も必要な聞法をおろそかにしているのではないか。門徒に対して形式的説法をする布教者は居つても、本当に法を聞く求道者が居らない。従つて本当の信仰者が居らないというところに、宗教家の無気力、又それらの形成している教団の無力の根本原因があると思う。だから第三の疑問に対しては、以上のような現実に対する反省をすゝめることによつて自ら解決点が見出されると思う。

さて、第一、第二の問題であるが、これは前に述べたように、科学と宗教との対立の問題である。これは両者の取扱う領域の相違を理解することによつて解決点を見出せるのではないだろうか。

即ち、科学が問題にする世界は相対界であるのに対して、宗教の世界は絶対界に関係する。哲学も絶体界に関することはあるが、哲学は学問であるから、どこまでも学的に論理的に追求していこうとする。然かも哲学にあつては絶対界への志向ということはあつても、絶対界に安住する、即ち哲学の到達点はあり得ない。然るに宗教にあつては、相対界に住む人間が端的に絶対界に入ることができる。それは信によつて可能となる。従つて信仰の世界は超合理の世界であり、もし言葉で表現しようとすれば、不思議としか現せないのである。そこのところを歎異抄第十章に「念仏には無義をもて義とす、不可称、不可説、不可思議の故に」と述べている。

然し現代においては、理性の立場で宗教を見ている学者（例えばアメリカのデューイ）もあつてヒューマニズムの上に立つて宗教を論じているが、私のみるところでは、デューイのような見解は果して真の意味における信仰と言えるかどうか批判の余地があると思う。

そこでO君の強調している盲目的信仰の強要の問題であるが、それは以上のような宗教、信仰の立場を理解した上で、更に次の事柄について注意することによつて自ら氷解すると思う。

即ち、我々人間の現実の相を最も謙虚に掘り下げてみることである。かの念仏宗の元祖と言われる法然聖人が、一般からは知恵第一の法然房と言われながら、御自身では「悲しきかな、悲しきかな、いかがせん、いかがせん。ここにわがごときはすでに、戒、定、慧の三学のうつわものにあらず。この三学の外にわが身にたえたる修行やあると、よろずの智者にもとめ、もろ〳〵の学者にとぶらいしに、おしゆる人もなく、しめすともがらもなし」と嘆かれている。このような例は他に数多い。この点から言うならば、真宗信仰については結局するところ、自己の無知に目覚めることが先決問題である。といつてもここのところは非常にデリケートな点で、真の意味で自己の暗さに気付くということは、とりもなおさず、真実の光に照らし出されて始めて可能なわけで、その体験なくして、ただ自分は罪人だ、愚者だと考えて見たところで（恐らくこの場合は大方は自己弁護のために言つている）たいていの場合は自分の独り決めに陥つている場合が多い、そういう状態の下では悲痛の涙も時がたつて、調子がよくなつてくればケロリとして「咽元すぐれば熱さ忘る」の諺通り、これでよいではないかという安価な自己肯定、自己満足に堕して了う。ギリシヤの哲人が「汝自身を知れ」と叫び、禅家で「脚下を照顧せよ」と教えるが、これ又至難の道である。然し

「松影の黒きは月の光かな」の句にも示されているように、自巳の背後に照らし給う光を仰ぐとき、我、我にあらず、我を哀愍し摂取し給うみ光の中なる我に気付くのではないか。そこのところに信仰の機微がある。

これまで述べたことによつて、私としてはO君の疑問とした点に、私なりに答えたつもりであるが、最后に一、二補足しておきたい。

それは、一つは、以上の論述の中で私は阿弥陀仏とか、如来とかいう言葉を使つたが、恐らく理解が困難かと思う。それどころか、そういう仏を信ずることと、俗にいう「鰯の頭も信心から」と言われることと、どれだけの相違があるかということは、常に信仰論で問題とされるところであるが、後者は勿論迷信である、何となれば全く根拠がないからである。然るに前者は、歴史的に約二千五百年前にインドに出生された仏陀によつて説かれた教であるというところに、動かすことの出来ない根拠がある。

次にもう一つ現代において教義の解釈の方法というか、経典の読み方というか、少なくとも三千年以前にインドにおいて当時の素朴な人達に最も受け入れ易い形で、象徴的に説かれた経典を、ただ表面的に読みとるのでは仏陀の根本精神に触れることは出来ない。今日宗教学界で非神話化の問題が論議されているのもこの点についてである。

以上O君の疑問に対して明答になつていないと思うが、紙数の制限もあるのでこの位で終りにする。不明の点については、直接お会いして話し合う必要があると思う。

三六、一二、二五。

（愛媛大学仏教青年会、機関誌、「運」第七号より転載。）

病床断片

菅瀬芳英師

病気は過去の業因である。救済は仏の本願である。業因のあらわれと如来のお慈悲とがはつきりと区別が立つていよ〳〵お慈悲がありがたい。

病気にかかるということは確に不徳のことである。自分が病気のために幾百人の人々に御心配をかけることは誠にすまない。中にも夜も眠らないで私の身の上を案じて下さる方があるそうだが誠に勿体ないことである。患うということは確に不徳である。

私が癌になつて入院して以来、気の毒じやといつて毎日沢山の人が見舞つて下さるが、実は私より気の毒な方が沢山ある。不治の難病にかかつた私が死ぬのは当然だが、患つている私ばかりが死ぬる様に思つていると大間違である。私はそういう人が気の毒でならない。後生の一大事は油断から仕損ずると蓮師も仰せられる。油断大敵じや々々。参りがけの駄賃に御恩報謝をさして頂くのが何より嬉しい。

横川法語

花田正夫

ひとすじに仏道を学び、その至奥に徹して、人生六十年、七十年と、幾山河を越えに越えられた方々が、おのずからうちにあふれるよろこびを、すら〳〵と一紙に誌されて、珠玉の言葉を世に遺されたものがあります。これこそまことの世の宝典であり、あとに生れた私共は、有難く頂き大切に語り伝えて、子々孫々への灯火としたいものであります。

さて日本の浄土教史をひもときます時、源信僧都の「横川の法話」、法然聖人の「一枚起請文」、親鸞聖人の「自然法爾章」、蓮如上人の「悔解文」等々が、夜空にきらめく明星の如く、一段と光彩を放つて居ります。このうちの「一枚起請文」は慈光誌上ですでに讃仰いたしましたので、今回は「横川法語」をあたらしく信誉させて頂きたいと思います。

源信僧都の「絵詞伝」には、

「僧都あるとき、一紙の法語をのべて往生の要路を示し給う。この法語は、もと往生要集の肝要をつつめて、愚なる者のために書きあらわし給うなり。しかれば往生要集を披覧するに堪えざるひとびとは、この法語を熟覧して翫味すれば、おのずから要集の意趣を得たるに異ならず。往生を願う人の安心起行、この一紙の法語において必せり、つくせり」

とあります。この一紙の法語の中に、ひろくは八万四千の一切の経意をおさめ、ふかくは釈迦弥陀二尊の本懐にかなう、珠玉の宝典であります。先ず全文を掲げましょう。

㊀まず三悪道をはなれて人間にうまるることおゝきなるよろこびなり。身はいやしくとも蓍生におとらんや。家はまずしくとも餓鬼にまさるべし。心におもうことかなわずとも地獄の苦にくらべべからず。世のすみうきはいとうたよりなり。このゆえに人間にうまれたることをよろこぶべし。

㊁信心あさけれども本願ふかきゆえに、たのめばかならず往生す。念佛ものうけれどもとなうればさだめて来迎にあずかる。功徳莫大なるゆえに、本願にあうことをよろこぶべし。

㊂妄念はもとより凡夫の地体なり。妄念のほかに別に心はなきなり。「臨終の時まで一向に妄念の凡夫にてあるべきぞ」とこころえて念佛すれば来迎にあずかりて蓮台に乗ずる時こそ妄念をひるがえしてさとりのこころとはなれ。妄念のうちより申し出したる念佛は、にごりにしまぬ蓮のごとくにて、決定往生うたがいあるべからず。

この法語を昔から「自我像の讃」と申されて居ります。誰か、弟子とか、信徒の人に依頼されて、法語を書いて与えるという風なものでなく、僧都の自我像の上にかかげるべき讃文としての趣がありますことは、この法語の一大特長と申されましよう。僧都の有名な御歌に

夜もすがら佛の道をもとむれば
わがこころにぞたずねいりぬる

とありますが、一切経を五回読み破られ、あらゆる修行をおおさめになつた僧都が、煩悩の底の底まで照破される佛智の鏡の前に立たれて、御自身の全煩悩の生活のすべてを打ちあけられて、ひたすら本願を仰ぎ、その底からおのずとわきおこるよろこびを、そのまま讃えていられるのであります。

眼を外にむけて佛道を求めている人には、そのいのちの流れは枯れ、みなぎる光は見出し得ないでありましよう。ここに地獄・餓鬼・畜生の三悪道とありますのも、僧都が御自身の内に見出される悪逆の様相であります。この僧都の説かれた地獄にくらべまして、詩人ダンテの「神曲」の中にも地獄が述べてありますが、その地獄は、ダンテ自身のではなく、ダンテを裁判官とする罪人の地獄で全然別な世界であります。

佛陀は四聖諦（苦・集・滅・道）をお説きになり、苦をあきらかに見抜き給うて、その因は煩悩にありとお定めになつて、その煩悩よりの解脱を教えられたのであります。即ち世間一般は、苦の原因を外にもとめて、是正、改革して行きますのとは、全く方向を異にするのであります。それかと云つて外の改善を放任するのではありませんが、それだけでは根本の解決にはならないので、どうしても内にその解決の光明を得てのうえに、外の改善の道も徹底するものであります。

聖徳太子が内に外に大混迷の日本にお出ましになつて、先ず御自身に佛道を求めて開眼せられ、やがて人材登用の道を開き、十七憲法を発布なされて、永遠の国是を樹立して

下さつたのは、御身にかけての佛道実践の範をおのこし下さつたものであります。

一、人間に生れた喜び

さて本文にうつりましよう。

身はいやしく、家は貧しく万事不如意の境界にあろうとも、人間に生れたことは大きなよろこびである、と僧都は述懐していられるのであります。そこには僧都は、着けた衣服のよろこびでなく、人間に生れた赤裸々のなりのよろこびを表白して居られるのであります。

この御言葉に対比して、ギリシヤ神話の一つに、

「手に触れるもの皆、黄金になるようにと、欲張つた願を神にかけて、その願がかなつてやれ嬉しやと喜んだのも束の間、なんでもかんでも手当り次第、片端から黄金化するのに参つて了つて、早速願ほどきを請うたという伝説のあるフリユギアの王ミダス、半神の霊シノレスに〃人間にとつて一番いゝことは何か？〃と尋ねたところ始めは頑として口を塞した霊が、余りしつこくせがまれて、癇癪まぎれに、

〃お前はお前にとつて聞かない方がいゝことを、無理に強いて云わせようとする。人間にとつて一番いゝことは今更聞いたつて追つ付かないこつたよ。生れなかつた方がいゝ、ということなんだから。その次にいゝことは直ぐに死んで了うこつたよ〃

と投げるように言つて、呵々大笑した」

とある話を池山先生は「佛と人」に引かれてあります。

これは全くおそろしい放言でありますが、たとえこのシノレスの前にお立ちになつても驚かず《よくぞ人間に生れけり》と、生き甲斐を見出されているのが、この僧都の御述懐であります。

二、本願と念仏

東海道線で浦郡から浜松にかけて、車窓から西を眺めると、いたるところに、岩が突き出ているのが見られます。それは庭石のように土地の上に置いた根の無いものでなく、深い岩磐地殻とでも言うところから生えぬいている岩が、地上に露出している趣であります。

僧都の「人間に生れたことのよろこび」のあらわれる根底に、本願にあひ、念佛を聞くよろこびがあります。本願念仏の岩磐地殻から、おのずとあらわれているたしかさ、たのもしさが、次のお言葉となつています。

「信心あさけれども、本願ふかきが故にたのめば必ず往生す。念仏ものうけれど称うれば定めて来迎にあずかる、功徳莫大の故に。本願にあうことをよろこぶべし」

大正の頃、東大農学部を卒業し、農林省技師であつた山田憲氏が、社会正義の美名のもとに不正背徳の奸商、鈴弁を殺し、死体を切断して行李詰として池中に沈めたのが後に発覚して死刑に処せられたことがあります。然し不思議にも山田氏は本願を聞き、念仏申す身と転じましたので、その余りにもあざやかな入信振りに種々の人から、何か懺悔録を書けともとめられましたが、本人は「私は懺悔なぞ出来る人間ではありません」と固辞して居りました。唯一つ仏教済世軍の真田増丸先生あてに次の書信を書いて居ります。

「大無量寿経の会座まさに終らとするに際し、仏、弥勒に告げて曰く。為に大利を得、為に大利を失う。大悲を信ずる者は即ち大利を得、信ぜざる者は即ち大利を失うと。……不肖、天下に大罪を得たるに、如来は悪人を正客と喚び給う。ここにいたつて、報謝の念、相続せざらんと欲するも豈得べけんや。嗚呼有難き哉。煩悩即菩提の境。

行くも死す、退くも死す、とどまるも死す。死は一瞬として免れず。汝、正念にして驀直に来れ、我能く汝を救うの声、天地に満つ。

合掌」

とあります。身から出た錆とは言え、一切から捨てられ、地上から葬られようとする大罪人が、報謝の念仏の中に「有難き哉」と信嘗して居る姿の中に、僧都と一味のものが見出されるのであります。

「信心あさけれども、……念仏ものうけれども……」と、我身のありのまゝをそのまゝ打ち明けられつゝ、それゆえに、深き本願、絶対善の念仏のたしかさをいよ〳〵渇仰されて、

「本願にあうことをよろこぶべし」

と結んでおられます。

掴む手をたよりとはせじおさな児を
抱きあげたる御手のたしかさ

読人不知

親鸞聖人が「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に」と、本願の念仏一つに満足随喜していられるのと規を一つにするものであります。

三、妄念と念仏

「妄念はもとより凡夫の地体なり、妄念のほかに別に心はなきなり、臨終の時まで一向妄念の凡夫と心得て…」と、最後の段にまいりますと、私共も自然に頭がさがらずには居られません。

「小釈迦」と云われ「小迦葉」と称えられた、一代の巨匠、源信僧都が、一切経を五回読破され、あらゆる修行、戒律を実践されて、そこに見出された御自身の姿は、妄念の塊、何処をついて見ても妄念ならぬはなく、これからのちもそこから脱し得ない一向妄念の凡夫としての罪業のかたまりでありました。

「二十五・三昧文」に僧都は観無量寿経の下々品の機の救済の文を引かれて「この文われら来世の誠証とするにたれり」と述べて居られます。

又、僧都畢世の大著、「往生要集」の劈頭に、

「それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤たれか帰せざらん。但し顕密の教法はその文一にあらず。事理の業因その行これ多し。利智精進の人はいまだ難しとなさず。予が如き頑魯の者、豈あえてせんや」

とありますことは、誰もよく知るところであり、更に、「要集」の中心に

「極重悪人　無他方便
唯称弥陀　必得往生」

とも、また

「我また彼の摂取の中に在り。煩悩に眼を障えられて見ることあたわずと雖も、大悲倦むことなく、常に我身を照したまう」

と、念仏を勧め、常照の大悲を煩悩に盲た御身の上に渇仰して居られます。

なお、七十六歳の六月十日、御往生の際、お弟子に、観無量寿経の下々品の文を読ましめられながら、頭北面西右脇に臥されて、念珠をとり称名念仏してやすらかに息絶え給うたのであります。

以上僧都の御生涯を通じて、御自身は飽くまでも、五逆十悪、具諸不善、無有慚愧の下々品の悪機をわが姿とされて「唯称仏」と無二の救いを頂いて居られるのであります。

「妄念のうちより申し出したる念仏は、にごりにしまぬ蓮の如くにして、決定往生疑いあるべからず」

とは僧都の信の中心であります。妄念をいじつて立派にすることではなく、臨終の時まで一向妄念の身と照らされて、そこにあらわれて下さる不思議の救いのひかり、本願の念仏を頂いて居られるのであります。

「善導大師の二河白道の譬は、貪瞋の河ふかくして妄念の流れやむことなけれども、ただ一向に弥陀の大悲を仰いで名号を唱うれば、念仏は妄念をこそ妨げれ、妄念にさまたげらるることなし」

と仰せられつつ、僧都はこの譬を見られるたびごとに、深く歓喜の涙を流されたと伝えられます。まことに有難くも尊いことであります。

昭和卅七年五月末日、稿了

堂の鈴（五）

佐藤強三郎

柏崎の茶舗（三）

お藤は後で時々考えた。〈あゝ、私が一心になつて一郎さんを思うていることを、その通り見て下さるとは、ありがたい事だ。また、私が財産を目当にねばつているのでない事をよく理解して下さるとは、胸のすく様な思いがする。又私が、お小夜さんを呪い殺してしまいたいという怖ろしい心を持つている事を、十分知り尽して、その上で、その恨む心を止め得ない事を憐んで、どこまでも呆れないとは、何という尊いお心であろう。……。

私が親類の娘の邪見を憎む、そんな怖ろしい心である事をも十分知つて、その上でどこまでも憐みをもつて悪く思わぬとは、誠に意外のことである。そんな尊い心がこの世にあろうとは今まで夢にも知らなかつた。私はお母さんまで疑つたり、嫌つたりしたのだ。又あの親類の娘をさげすんだのであつたが、ああ、自分はあの娘よりも、なお邪見なものである。神ならぬ他人は、こちらが説明しなければ、私の境遇を知るわけがない、他人の心を見透すことも出来ず、境遇も知らないものが、色眼鏡で他人を見るのも無理はない。ああ、知る人ぞ知る。悪い心の中をみんな知つて、それを何処までも呆れぬお方が一人あれば、もう大勢の人々から一、一、見て貰わなくとも満足である。……。

人を呪うなんて自分には本当に和かな心が無かつたのだ人様が自分を理解出来なかつたのも無理からぬ事である。自分の心は本当に清らかなものでなかつたのだ。

一郎さんもさぞ不愉快であつたであろう。一郎さんに立派につかえ通すことの出来ない妻であつたのだ。一郎さんの迷うのも無理もない。他の女へ心をうつすことも無理もない。……然しありがたい事には、こんな不浄な心を持つている私をよく知つて、その上で憐みをもつて、どこまでも呆れぬという不思議なお慈悲を聞いたのだ〉

お藤はなお心に思つた。〈この不思議なお真実があると

は、まことにありがたいことである。この絶対の真実一つあれば、人にどう思われようとも、自分はこれ一つをたよりにして生きて行こう。一郎さんにどう思われようとも、つくすべきはつくして行こう。……。

一郎さんが善くなろうと、なるまいと、他人にどう思われようとも、無碍のお慈悲一つにひかれて、つたない自分の一心をつくして行こう……〉

お藤は、人を離れて、仏に帰命した。

女は男に成れない。男も女に成れない。これが自分自分の宿業というものであろうか。そして女にも男にも皆苦しみは絶えないであろう。…「そくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんと思し召したちける本願のかたじけなさよ」…とはこの事であつたのか。…無碍の光に照らされて、よし前途は如何あらんとも、よき事もあしきことも業報にさしまかせて、ひとえに本願をたのみまいらせて行こう……と、くりかえし〳〵思いふけつた。

お藤は楽しんで歎異抄を拝読した。

「弥陀の本願まことにおわしまさば釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば善導の御釈虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば親鸞が申すねまたもてむなしかるべからずそうろうか。詮ずるところ愚身の信心におきてはかくの如し。この上は念仏をとりて信じたてまつらんともまたすてんとも、面々の御はからいなりと云々」

と第二章にあるのに気がついた。

信哉さんから聞いたことであるが、三千年も前に印度のお釈迦様が仏教を開かれ、その仏説が支那の善導大師に伝わり、又日本の法然上人へと、脉々と伝わつて来たのを知り、今更の如く、信仰の力の偉大なるに感じ、今後もいつまでも続くであろう、これも無碍のお慈悲が温泉であるから、十方を尽くして無限に続くであろう、と思つた。

お藤はこの家に伝わつて来た御和讃を見て驚いた。それはいつも仏壇の前にあつたのに、今迄何とも思わずに過して来たのであつた。近頃時々読んでは、今更の如くありがたく感じた。その中に、

〇智慧の念仏うることは　法蔵願力のなせるなり
　信心の智慧なかりせば　いかでか涅槃をさとらまし
〇無明長夜の燈炬なり　智眼くらしとかなしむな
　生死大海の船筏なり　罪障おもしとなげかざれ

と、あるのを見て、智眼くらしと悲しむな、罪障おもしと

歎かざれ、とは何というありがたいことであろうか、と身にしみた。

○煩悩具足と信知して　本願力に乗ずれば
　即ち穢身すてはてて　法性常楽証せしむ

とある。まことに、広大無辺の本願力に乗じて一生を終らせて貰うばかりである。

○無碍光の利益より　感徳広大の信を得て
　必ず煩悩の氷とけ　即ち菩提の水となる

○罪障功徳の体となる　氷と水の如くにて
　氷多きに水おおし　障り多きに徳多し

とあるのを何度も〳〵繰り返して読んではありがたいとうなづいた。

○蛇蝎奸詐のこころにて　自力修善はかなうまじ
　如来の廻向をたのまでは　無慚無愧にてはてぞせん

等々、黄金がちりばめられてある如く、尊く有難くいただいた。

×××　×××　×××

信哉はそれから間もなく旅に出た。出る時にお藤の店に寄つて

「お藤さん、どんなことがあつても、辛抱して離婚だけはなさらずに、考えて下さい。私はまた来ますから」

と言つた。

（続く）

依名得運本生物語

ジャータカ物語

昔々、印度のある所に徳の高い修業者が五百人の弟子達を導いておいでになりました。その弟子の一人に「悪者（あくしゃ）」と言う名前の少年がおりました。彼は人々から「悪者よ、来なさい、悪者よ、行きなさい、」などとその名を呼ばれるのを不吉な事といやに思つて、ある時その師の前に出て、「お師匠様、私の名前は不吉でございます。どうぞ他のよい名前に改めて下さいませ」と願いましたところ、師は「それではお前は国中を巡つて、自分の気に入つた目出

度い名前を探して来るがよい」と仰言いました。

そこで彼は何とかして幸福を招くよい名前を探したいものだと、村から村へ旅を続けて都へ辿りつきました折も折、おとむらいの人々に出会いました。そこで彼「悪者」は早速その死人の名前を尋ねますと、その名は「生命あるもの」と言うのでありました。彼は驚いて「そのような目出度い名前の人でも死ぬのでしようか」と言いますと、人々は「名前と言うものは符牒のようなものだ、あなたはわからぬ事を言う人だね」と言つて通り過ぎて行きました。これを聞いて彼は自分の抱いていた名前についての迷信の愚かさを始めて感じながら、その都の中にはいつて行きました。

するとある家の戸口に一人のみすぼらしい姿の女が坐らされて、借金を返す事が出来ないと言うので縄で打たれていました。そこで彼は又その女の名を尋ねますと、その名は「宝守（たからもり）」と言うのでありました。それを聞いて彼は「そんな結構な名前を持つていても借金を払うことも出来ないのですか」と言いますと、人々は又「名前は目印（めじるし）のようなものなのに、この人は馬鹿げた事を言う人だ」と言いました。

彼は名前に対する偏見を一層去つて、都を出てなお旅を続けて行きますと、路に迷つている人に出会いました。そこで又その人に名前を尋ねますと、その人は「旅慣（たびなれ）」と答えました。「旅慣」でも旅路に迷うのを見るに及んで彼はいよ〳〵名前に対する迷いを捨て果てて、急ぎ師の許へ帰つて来ました。

師は彼を迎えて、

「どうだつたか、気に入つた名前が見付かつたか」

と尋ねられますと、彼は、

「お師匠様、どのようによい名前でも、それは符牒に過ぎないという事を知らされました。寿命の長かれと名付けた名前の者も不吉な名の者と仝じように死にます。どんな富をあらわす名のものも貧乏致します。又旅路にも迷わぬような安らかな名前の者も迷います。

真実の教を学ぶ事を忘れて、名に依つて幸福を得るように考えましたのは、私の愚かな迷いでありました。私はもはや他の名前を頂かなくとも結構でございます。」

と言いました。

これを聞いて師は次の偈文を唱えられました。

生命あるものの死し
宝守の貧しく
旅慣の旅に迷えるを見て
悪者は再び還り来たれり

あとがき

麦秋の候となり、農家の方々の忙しさを想像申して居ります。皆様の御健勝をことに祈念致してます。

○

四月末日。北海道芦別から東京の三菱鉱業本社に栄転せられました近角真観様の御来訪をうけました。承りますと炭労問題で三貫目もお痩せになつたとのこと。常観先生の御遺訓通りに、日本の労働問題の最中に、信の上から全身心を打ちこまれての御活躍の御姿に接しまして、

両刀鋒を交えて避くべからず。
好手ありて、猶し火裏の蓮の如し、
宛然としておのずから冲天の気あり。

との山岡鉄舟居士を開眼せしめた洞山大師の頌文を拝する思いがいたしました。「花に寄せて」の御原稿の中にもそうした信徳の自然の光を知らされます。

△岸本解雄さんは、愛媛大学で仏青の世話をして下され、青年会では「般若心経」の輪読。御宅では「教行信証」の講話。法灯を青年学徒に高く掲げて居られます。

△五月廿五日。京都の榊原徳草さんが御来訪一泊して下さいました。池山先生忌の記念を卅九年の秋、廿七回忌の時にと申し合せました。さてこの二年の間生命無事なれと祈念されることであります。又承りますと、白井先生が、御忙しいことと、御老齢になられたことで、御法縁を井上善右エ門様にゆだねられて、毎夏の盛岡市への御帰省も中止せられました由。私共は毎夏先生を名古屋にお迎え申して御法縁を患まれ得ることとのみ勝手にきめて居りましたので、サテ〜〜と頭をかかえました。そこで時候のよい時に名古屋へ御来駕を下さるよう榊原様に托して先生に御依頼申しました。

× ×

◎急告 御案内

六月十五日午后六時半。一道会館。

仏典と私との親しみ

福島政雄先生

● 御案内

◎毎月第一、二、三日曜、午后一時半。一道会法話。市電新郊通一丁目下車、東一丁半。一道会館。

◎毎月廿四日、午前午后、昭和区小桜町、教西寺法話会。市電御器所通下車。桜花学園東側。

● 筆者御住所

東京都目黒区上目黒五の二五〇七　近角真観
新潟市関屋堀割三の十一　佐藤強三郎
松山市正円寺町三五八　松本解雄

定価一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十四巻第六号昭和三十七年六月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可